

俳句が結んだ、一本の絆

震災地大槌高校（岩手）と交流

★被災の地・仙台に学んだ者として

やらねばならぬことありき…

絆を結んだきつかけは、東日本震災後初めて開いた五月の句会の席であつた。

大震災鎮魂の意を表し、三月は通信による句会に急きよ変更した。被災の地・仙台の大学に学んだ縁ある我々として、何かをしたいッ！壊滅的被害を被った岩手、宮城、福島県で、俳句クラブあるいは俳句を授業に取り入れている高校があれば、何らかの支援をしたいーとの声が仲間から澎湃として湧き上がった。

早速、各自が該当校を捜すことにした。俳句甲子園本部へ問い合わせもした。各学校のHPなどを参考に搜した。該当校が見つからない。二か月が過ぎ、諦めかけていた七月、岩手県立大槌高校が四国愛媛県松山市の俳句甲子園に特別招待されるーという読

売新聞関西版に載ったニュース（十四日付ネット記事）を知った。

同高校は、未曾有の被害を受けた岩手県三陸海岸の大槌町にある。その校舎は一時避難所として一千人の被災者を受け入れ、病院、金融機関、幼稚園・小中学校の仮教室としても使われた。生徒たち自らが被災者でありながら、町づくりの地域復興協議会にも参加、提案し、様々な活動を行ってきたという。

★俳句甲子園行き前に

支援チャリティー金を送る

早速、関東圏の句会仲間に、その旨を伝え、支援方法を相談した。八月半ば過ぎに松山市で開く俳句甲子園大会に出発する前に、生徒らへチャリティー支援をしようーと決まった。七月末、その支援の申し出を書いた手紙を添え、句会運営の資金（剰余金）と新たに会員に呼び掛けて集まった額を加えて送金した。もちろん「俳句大会に参加する貴校の存在は、自分のことのように大変嬉しいニュースですー」とも書き伝えた。

翌日、同高校の高橋和夫校長から松本宛にお礼のメールを頂戴した。その後も松山市訪問の経過や結果などについて、その都度、丁寧な報告を頂くこ

とになった。

★同高校生らは、

ひよっこりひよたん島の子らと重なる

明けて今年一月、朝日新聞夕刊（二月二十三日付）のシリーズ「ニッポン人脈記」欄に「進め ひよたん島⑫ 町の宝の君らを乗せて」という見出しで、同高校の震災後の活躍ぶりが掲載された。

担当記者は「震災後、大槌で暮らす私には、この高校生たちがへひよっこりひよたん島Vで困難を乗り越えていく子供たちと重なる。きつと彼らはくじけない。進め！ 大槌」と結んだ。

ここ大槌町の蓬莱島は、作家・井上ひさしさんの作品に出てくる、ひよたん島のモデルとされる島の一つであることはよく知られている。

★行き届いたあいさつに出合い

感服する財界人

折りも折、同高校に関する、次のような新聞に載ったある財界人のエッセーを読んだ。住友信託銀行相談役の高橋温さんは、「すれ違う生徒が一人の例外もなく今日は！と大きな声で私に向って挨拶をする。

：災害の跡を見て塞いでいた心に勇気をもたらった」と同高校の生徒らを称賛している。日経夕刊人あすへの話題V（二月七日付）。「あいさつの大高」をスローガンにしている同高校の行き届いた指導ぶりとその実践成果、まさに面目躍如である。

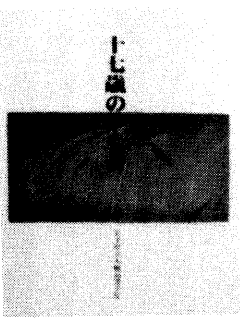
★句集『十七歳の十七音』と

寄せ書きが届き、感涙：

一月末、思いも掛けず、同高校からの「贈り物」が届いた。俳句担任の切田望先生の、俳句甲子園での経験、句集発行の経緯などを織り込んだ丁寧なお礼の手紙のほか、句集『十七歳の十七音』と俳句甲子園に招待された女生徒五人からの寄せ書きメッセージの色紙である。全国高等学校文芸コンクール俳句部門優良賞の同校生徒

の作品が載っている文芸集も添えられていた。

句集は俳句甲子園に招待された記念として、また松山市への感謝を込めて、同校では初めて編まれた文集である。二・三



年生全員の二二〇句、卒業生が震災前に詠んでいた



二四句と自らの解説・級友の感想文から成る。

色紙には感謝の言葉と感想があり、松山道後温泉で撮影した、うれしそうな写真が添えられている。

「ご支援いただき本当にありがとうございます。今回の旅で俳句について多くを学び、ますます俳句が好きになりました。これからも自分の気持ちを句に表していきたいと思います」等々と率直な文章がはつらつと綴られている。このように青春真っ盛りな時から、俳句に親しんでいければ、人生が豊かになりそうな気がするとしきり、感涙にむせることしばしばであった。

この句集が朝日新聞夕刊（二月十四日付）に「大

槌高生一七音に込めた思い」との見出しで取り上げられた。「震災前後の句が冊子となり被災地の若い心が十七音に凝縮されている。大槌高校では家族を失った生徒は三七名、卒業生のうち死亡、不明の三名には家族に冊子が手渡されている」と記されているではないか。感慨深いニュース記事であった。

★大歳時記セット本を送る

当句会のメンバー一同は、素直で若い情熱を感じさせる句にふれて、一様に感動した。句集の冊子が届いた直後に開いた一月句会で回覧したのだ。その日の出席者十二人全員がこぞって、句集のお礼を兼ねて、歳時記を贈呈する話しが出て、即決した。

そして「善は急げ」とばかり、三年生が卒業する前に届くよう『角川大歳時記』五冊組一セットを学校に急送した。さらなる交流の始まりとしたい。今度はずっと現地へ行ってみたいと、皆それぞれ内心に希望の芽をふくらませている。

◆印象句を再現◆

冊子にある特に印象に残った作品と本人の解釈文から、岩渕如雨と松本貞風（感想入り）の二人選。かたつむり歩みの証銀の道 三年 小笠原彩織

夏の句、歩みは遅いが後ろに銀色に輝く道が出来
る。一步一步進んでいることに気付く。

※如雨／貞風評〓觀察力があり銀の道が輝く。

弓始一矢放てば音となる 二年 田中 栞

新年の句、新年にふさわしい力強い音が響く、一
年の始まりを詠んだ。

※如雨／貞風評〓風切る矢の音に立体感あり。

着くずれも可愛さ語る七五三 卒 碓川みもり

着慣れない着物を着て動き回った後の着崩れさえ
も可愛い、子の成長を実感している親の雰囲気。

※如雨選

◆印象に残った震災句。如雨、貞風の二人選◆

▼貞風選

浮きの世と彼方を隔つ彼岸花 三年 北田 南妃

ありふれた海の香りよ遠き春 三年 佐々木 仁

もう会えぬ君に捧ぐは夢華火 二年 三浦 美保

被災地の蛍の明かり町照らす 二年 佐々木 駿

▼如雨選

あの日からまだ見ぬ光秋近し 三年 阿部 春樹

子の為に低空の燕風を切る 三年 越田 由惟

溢れ出せ市場に並ぶ初鯉 二年 倉本 大輔

★これを「絆」と、名付けむや！

わずか半年ほどの手紙、メールの交流だが、我々の
のささやかな支援の気持ちは伝わったように思いた
い。我々の方も、激甚被災地にあつて、前向きに確
かに生きてゆく生徒たち、温かく導く先生がたから
元氣・勇氣をもらった。青春の心の十七文字から感
動をもらった。素晴らしい学校を選んだ。この交流
はほんわかと一本の「絆」に結ばれているのだ…。

★今秋、三陸で同期会を予定

この秋、大学卒業五〇年の記念会を「お金を使う
なら被災地に恩返しを」、「この目で見よう被災地を」
と三陸で催すことを決めている。当句会メンバーは
率先参加し、この機に、大槌高校を表敬訪問できれ
ばと思う。おそらく初めてとは思えない対面となる
かもしれない。乞う！参加者多数を。

~~~~~

大槌町の復興、大槌高校のご発展を祈り、高橋校  
長、切田先生ほか教職員の皆さん、生徒さん、卒業  
生ら一同の、これからの歩みに幸あらんことを！！

(松本貞風／岩渕如雨・共記)